

HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 306



1997 MAY



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

平成9年度通常会員総会のお知らせ!!

日本ヒマラヤ協会平成9年度通常会員総会を下記により開催いたします。

ご承知のように、総会は本会の最高意思決定機関でありますので、会員の皆様には万障繰り合せのうえ出席くださるようお願いいたします。

なお、やむを得ず欠席される場合は、定款の定めるところにより、委任状を必ず提出されるようお願いいたします。(委任状は、別途送付いたしました料金受取人払はがきをご利用ください。) 5月20日までに必着するようお願いいたします。

記

1. 日時 平成9年5月31日(土)午後1時～2時
2. 場所 東京都豊島区東池袋4-7-7
かんばヘルスプラザ東京
☎ 03-5952-6881
JR池袋駅東口から徒歩8分
地下鉄有楽町線東池袋から徒歩2分

表紙写真

ジーロン川に沿ってドンドン南下して行くと、突然平坦地となり、その向こうに美しい連峰が姿を現わした。ヤンラ・カンリノと直感したが、帰国して隊員の精査により、ランタン・リルの西面であることが判明した。左から主峰(7,234m)、すぐ隣がメラ(6,958m)、右の肩が6,672m、右端はゲンゲ・リルン(6,581m)である。(山森 欣一)

ヒマラヤ No.306

- | | |
|-----------------------------------|------|
| 1. カラコルムの動物たち | 井上重治 |
| 9. ヤンラ・カンリ偵察記 | 山森欣一 |
| 16. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・トピックス・Books〉 | |
| 18. インドの祝日 | |
| 19. パキスタン登山隊 1997 | |
| 21. ネパール登山の手引き(4) | |
| 24. 寸感・事務局日誌 | |

カラコルムの動物たち

井上 重治

岩と氷河だらけで、雨と緑の少ないカラコルムにも動物たちは生きている。餌の乏しさに加えて、強烈な直射日光と夜間の冷え込み、遮蔽された寝場所が少ないなど、決して恵まれた自然環境ではないが、それでも彼らは生きている。これまでのカラコルム・トレックで得られた動物たちに関する話を若干まとめてみた。

■アイベックス（野性山羊）と

ユキヒョウ（雪豹、スノー・レオパルド）

カラコルムにはマルコポーロ・シープ、褐色熊、アジアノロバなど、極めて珍しい大型の野性動物が住んでいる。特にカラコルム・ハイウェーの終点、クンジェラブ峠（標高4700m）を中心とした国立公園内に多いといわれるが、私のようなトレッカーには全くの幻の動物である。それに対してアイベックス（*Capra ibex sibirica*、高山に住む野性の山羊）は現実のものとして身近に感じられた。日本で言えば分類は異なるが、さしずめカモシカに相当する。頭から足の先まですべて薬用になるといわれるアイベックスは商品価値が高く、このためヨーロッパ・アルプスではその数が極端に減少しているといわれるが、カラコルムにはまだたくさん生息している。

アジア産のシベリア・アイベックス（ヒマラヤ・アイベックス）はヨーロッパ産のアルプス・アイベックスより大型で角も長い。1995年秋の三週間に渡る専門家の調査では、クンジェラブ国立公園を縦断するカラコルム・ハイウェーの近くで66頭のアイベックスが目撃された。ガイドのアッバスは1995年の夏、ヒスパー氷河で約200頭のアイベックスを見たと言ったが、数が多すぎてには信じられない。しかし、日本ヒマラヤ協会の寺沢玲子さんの話では、登山シーズンが終了した10月のバルトロ氷河で列をなして岩場を歩いているのを目撃したという。私は実際にアイベックスの姿を見る機会がなかったが、真新しい住居や体毛に触れ、落ちていた大きな角を手を持ってみることでできた。あまり人の入らないナルタル谷奥の断

崖の下を歩いていたら、突然石が落ちてきた。現地ガイドは休息していたアイベックスが突然の人の侵入に驚いて逃げていった時に落とされたものだろうと言っていた。

カラコルムでもアイベックスの狩りが盛んで、猟師にもしばしば会った。猟銃で直接しとめることもあるが、犬による生け捕り法もよく用いられる。犬を使ってアイベックスを逃げ場のない崖上に追い込み、パニックに陥し入れて日頃の冷静な対応力を失ったアイベックスを捕獲するのだという。しかし、敵もさるもので、下降が不可能と思われる岩場を半ば墜落しながら下り、最後はちゃんと四つ足で立って逃げることもあるという。野生動物の機敏さをまざまざ見せつけられた感じである。動物を生け捕りにするのは、宗教上の理由もある。大半が厳格なイスラム教徒であるカラコルムの住民は、異教徒が殺したり、死んでいる動物の肉は決して食べない。自分たちの手で殺して血をとったものしか食べないのである。寺沢玲子さんの話では、1996年に訪れたフーシェ村で大歓迎を受け、ぜひアイベックスの肉を御馳走したいといって村人が狩りをした。7、8発鉄砲を撃つ音が聞こえたと思ったら、実際に一頭のアイベックスをしとめて持ちかえった。その肉料理は大変おいしかったという。カラコルムやヒンズークシュの昔の岩絵にもアイベックスを狩りする姿がたくさん登場しており、数千年前から食用にしていたことが分かる。

アイベックスの子供は雌山羊につけて育てることが可能である。しかし、成獣になると野性が戻ってきて気性が荒くなり、好んで危険な行動をとる

▼チャラクサ谷K₇BC近くに落ちていたアイベックスの角(角の節の数から9歳と14歳の雄と推定)



という。この点家畜山羊とはまったく異なる。

アイベックスの雄姿を代表するのが半円形に大きく反り上がった角である。マルコポーロ・シープのように多重に巻き込むことはないが、この角に刻まれた節くれの数はその年齢を表わしている。木の年輪と同様に、夏には成長し、冬に停滞するためにできるのであろう。この角は高価で取り引される。1994年6月にフーシェからチャラクサ谷を溯行して標高4400mのK₇ベース・キャンプに数日滞在した。ベースキャンプからチャラクサ氷河右岸の山を登ると、とある岩陰にアイベックスの糞がたくさん積もっていた。恐らく10cm以上もあった。これを見た現地ガイドは「ここはアイベックスの寝床だ」と断定した。よく見ると、糞にまぎれて灰色の毛がついており、今にもアイベックスが戻ってきそうな錯覚を覚えた。この糞の栄養のためか、付近にはサクラソウがあざやかなピンクの花を咲かせていたのを覚えている。

このキャンプの付近にはアイベックスの角がたくさん落ちていた。日本なら家に持ちかえて床の間に飾りたいほどの見事な角であった。アイベックスの角がたくさんあることは、この辺にアイベックスを食べるユキヒョウ (*Panthera uncia*、高山に住む大型のネコ科動物) が居ることを示している。実際のベースキャンプを去る日の朝、テントの回りについていた足跡をさして、「これは昨夜つけられたユキヒョウの跡だ」と同行した地元のパーターが話してくれた。ひづめの形と歩き方の特徴から彼らには容易に分かるらしい。尾までいれれば体長2m、体重40kgもあるユキヒョウは、

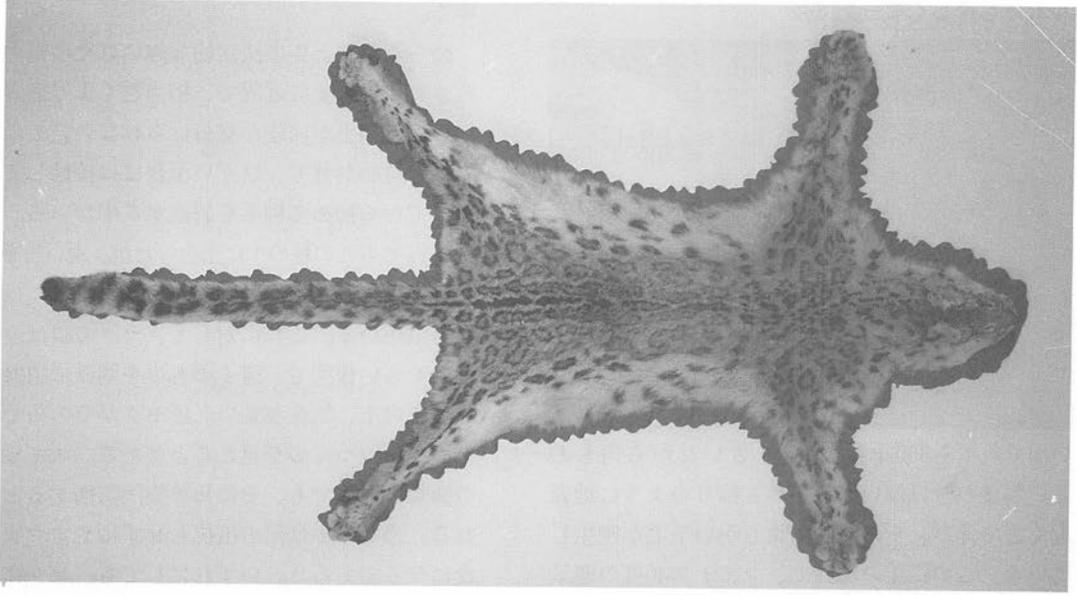
15mもジャンプして一発で獲物を倒すといわれる。しかしまず人を襲うことはないと聞いて安心した。この点、熊よりは始末がよい。しかし家畜はよく襲う。上部フンザのパス-村では数十頭の羊が一夜にしてユキヒョウにやられたことがあったという。決して餌に困って狩りをしたわけではなく、一種のゲーム感覚で本能的に羊を倒すのだという。フンザ全体では毎年100~200頭の家畜がユキヒョウによって殺されるが、死体はキツネが来てきれいに掃除する。

ユキヒョウは4000mから6000mの中央アジアの高山に住んでいて、アイベックスに比べればはるかに珍奇な動物である。灰白色の体に海の花模様をつけたユキヒョウが、雪の積もった岩場に立ってかっと目を開き、長い尾を振り上げた姿は、まさに「高山の女王」といわれているほど気品と威厳に満ちている。自慢の長い尾は1mにも達し、雪原を歩く時はほうきのように振り回すので、足跡も消えてしまうほどだといわれる。ユキヒョウはめったに吠えないが、怒った時はヒョウ特有の深い声をだすのでよく雪男と間違えられる。

しかし、ユキヒョウの数は高価な毛皮と家畜の敵であるために年々減少してきた。地球全体をみても、アジアの高山地帯に7000頭以下が居るに過ぎない。このうちパキスタン領内にいる数は400頭近くと推定されているが、この数さえもアフガニスタンの内戦で逃げ込んできた難民ならぬ避難動物を少なからず含んでいる。ユキヒョウの生態はまだ謎に満ちており、その解明ができる前に絶滅することが心配されている。このため、ユキヒョウを保護するための財団が作られ、その国際会議が八回も開かれている。ユキヒョウは生態系保護の象徴動物になっているのである。その対策の一つとして、ユキヒョウの好物であるアイベックスを殖やす計画が進行中である。試験的にフンザのバル谷の住民に補償金を渡して、アイベックスを捕ることを差し控えてもらっている。ちなみにヨーロッパ・アルプスのアイベックスはイタリアで人工的に繁殖してアルプスの山へ放しているという。

日本ヒマラヤ協会の江尻健二さんの話では、モンゴルのゴビ自然博物館にユキヒョウの剥製が展

▼モンゴル博物館のユキヒョウの剥製（江尻健二氏撮影）



示されているという（写真参照）。さらに、寺沢さんはヒスパーの山奥の村でユキヒョウの毛皮が敷物として使われている家を何軒か見たという。そればかりか、ユキヒョウの剥製を10万ルピー（30万円）で売ってもよいと商談をもちかけられたほどである。1996年夏の最新の話である。しかし、生きているユキヒョウの姿を見ることは大変難しい。ユキヒョウ国際会議のメンバーでさえもほとんど見ていないのである。ユキヒョウの写真が世界で初めて紹介されたのは1972年のことである。場所はクンジェラブ峠の西に位置するチトラール・ゴル国立公園内で、米国の動物学者シャラーが撮影に成功した。この写真は全世界に大変な衝撃を与えた。不幸にして子供を連れたこの雌のユキヒョウは間もなく射殺されてしまった。それから20年近くカラコルムにはユキヒョウの姿は見えなかったが、5年前にオーストラリア人がチトラール・ゴルで4頭のユキヒョウの写真撮影に成功した。さらに昨年春には別の1頭が現れ、驚くことに衆目の見ている前でマスツージ川の近くまできてマーコール（絶滅が心配されている最大の野性山羊）を殺して食べたという。それからなんと丸2日間もチトラール市民の眼を楽しませた。日本人では、1987年10月、ヒマラヤのチョモランマの6000mの雪面を疾駆する姿がテレビ撮影班によって収録された。

■ヤクと牛

本当の野性のヤク（*Bos mutus*）はチベット、パミール、カシミールの4000mから6000mの高原に住んでいるが、固体数が減少してめったに見られない。人間に飼い慣らされて準家畜となったヤク（*Bos mutus grunniens*）はカラコルム、ヒマラヤ、チベットの4000mを越す高所にたくさんおり、研究もすすんでいる。黒褐色の体毛をもった野性のヤクに比べて、家畜化されたヤクは体がやや小さく、体毛もさまざまである。1995年秋に訪れた4700mのクンジェラブ峠は、まさにヤクのオンパレードであった。雄ヤクは体重700kgを越すものがあり、角長も80cmに達する。雌ヤクは小さ



▲クンジェラブ峠のヤク（手前が雌ヤクと子供、背後が雄ヤク。ヤクは雌でも角がある）

▼麦を脱穀中の6頭のゾウ（フーシェ谷）カラコルムでも珍しくなった風景



いがそれでも300kgもあり、小さいながら角もある。胴まわりは深い剛毛がふさ飾りのように地表近くまで伸び、その内側に柔らかい下毛が密生している。この二重の防禦で、マイナス40度の寒気にも耐えるという。

ヤクは山岳地帯の荷物の運搬に使われ、200kgの荷物を1日32kmも運ぶという。その外、脂肪分の高いミルクを産し、肉も最高級の牛肉よりもおいしいといわれる。硬い毛はマットやテントカバーに利用され、柔らかい毛で衣服が織られる。革は靴や鞆になり、糞は冬季の貴重な燃料になるので、その経済的な価値ははかり知れない。ヤクはまた手紙の役目もはたす。あらかじめ取り決められた暗号に従って、ヤクの長い毛を編んだり、結んだりすると、遠く離れた部落まで情報が伝達される。人間が険しい高地に住めるのは、まったくヤクのお陰だといっても過言ではない。

ヤクはお腹にひびくような低音で鳴くのでgrunting ox（ぶーぶー鳴く牛）といわれ、一般に大型の牛のように思われがちであるが、実際はかなり異なる。人間によく飼いなされた牛は踏み跡をよく覚えていて、放牧の行き帰りも忠実に同じ道をたどる。狭い道になにか障害があると（例えば人が道中に立っていると）、その障害が除かれるまで辛抱強く待っている。ヤクはこれに対して、自分で判断して最も歩き易い場所を選んで行く。従って、険しい山道を歩く時は牛ではなくヤクを先頭にたてることになっている。背中が大きく盛り上がったヤクはずんぐりむっくりで、一見鈍重のようであるが、雪や氷の急斜面を走る姿を

見ると、意外に敏捷で、狭い岩道も巧みに登ってゆく。

恐らくヤクと牛の決定的な違いはその視力であろう。牛は大変な近眼で、相当近くまで寄ってこない、相手が何物か見分けられない。その上、牛は好奇心が強く、ひどい場合には接触してなめてみてから初めて相手を認識する牛がいる。ウルタル谷でもこの種の牛に出会ったが、鋭い角をもった黒牛ににじり寄られてなめられるまでには相当な勇気がある。これに対して、ヤクの眼は遠視に近くらい優秀で、遠くのことを明確に認識できる。その上、気性が荒い。雄ヤクがその角で雌ヤクの尻をつつくのを見たことがある。ユキヒョウの襲撃に対しても、その角で集団防衛するといわれる。恐らく牛は何の抵抗もせずにやすやすと餌食になるであろう。いずれにしても、ヤクには野性の味が色濃く残っている。

雄のヤクに雌牛を掛け合わせた混血の牛がカラコルムにいる。現地ではゾーと呼んでいる（ネパールではゾムという）。インド、アフリカにいる象とは似てもつかない別物である。一代雑種であるゾーは体力、活力とも両親より優れていて、強情すぎるヤクに代わって農作業に好んで使われている。高度4000mのゴンドゴロ谷で見たゾーは全体が黒光した大型の牛で、環境に適応して丸々と肥えていた。フーシェ谷のカンデでは、このゾー6頭を棒でつなぎ、ぐるぐる回しながら収穫した麦を踏ませて脱穀している光景に出会った。6頭が地響きをたてて鼻息荒く突進するさまは、近くで見るとすこぶる迫力がある。麦がゾーの糞に汚染されないように、バケツをもった少年が後をつけて一緒に回っていた。ゾーの雌は子供を産めるが、雄は繁殖不能だという。このゾーはカラコルム東部のフーシェ谷にたくさん放牧されているが、西部のフンザ谷ではほとんど見かけなかった。その理由をパサー出身のガイドに尋ねると、フンザ人やワーヒー人は純血を好み、混血はきらいだという。どうも民族性の差によるものらしい。

■山羊と羊

山羊と羊の関係も若干ヤクと牛に似ている。元来従順で群れをなす習性のある羊は、人間の与え

▼ヒマラヤ・タールの雄

(ネパール、パンボチェで江尻健二氏撮影)



た範囲内で集団行動し、自分で判断することがない。このためユキヒョウなどの被害にあうと、数十頭が一度にやられることになる。これに対して山羊は動作が活発で、高い所に登る習性もっている。寒さにも粗食にも耐える環境適応力もあるから、生存をおびやかされる事態に対してはある程度自分で対処できる。山羊は木の葉を好んで食べるが、羊はまったくの草食性で、地表の短い草まで徹底的に食べるので、羊の群れが通り過ぎた後は草はきれいになくなってしまう。カラコルムでは羊は3500m以下に多く、それ以上の高所には山羊が圧倒的に多い。

ところで、家畜山羊の原種はノヤギ (*Capra aegagans*) (別名パザン) といって、今でもパキスタンからトルコに至る小アジアの荒れた丘陵地に住んでいる。体はアイベックスよりいくぶん小さいが、家畜山羊よりは大きい。パザンの習性はアイベックスによく似ており、危険な急斜面をうまく登り、足場の悪い所はやすやすと飛び越すという。一般に山羊の仲間は足の指がよく発達していて、左右に開いた大きなひづめは、岩をよく掴むのに適している。その上、パザンは異常なほど警戒心が強く、鋭い嗅覚と聴覚で外敵をうまくさける術を心得ている。この警戒心があるからこそ、今日まで生き延びてこられたのである。カラコルムにノヤギがいるかどうかは定かではないが、仮にその姿をみても、素人の私には恐らくアイベックスとの区別がつかないであろう。

羊の祖先には4つのルーツが考えられている。このうち中央アジアの野性羊はアルガリ (*Oris*

ammon) と呼ばれ、古代羊の中では最大の種である。モンゴル、ゴビ砂漠、チベットなどの中央アジアに分布し、一部は天山山脈を越えてアラル海まで達している。1271年に中国への旅の途中で、マルコ・ポーロがこのアルガリを見て、「大きさはロバの如く、長くて太い尾を持つ」と記録している。古代羊の特徴は有色の太くて硬いヘアーとその内側の柔らかな羊毛の存在である。この外側の硬いヘアーをなくして柔らかなウールだけ生えるように改良した「メリノ種」がオーストラリアで開発されてから家畜羊は爆発的に普及した。

中央アジアにはこの他変わったヤギ属の野性動物がいる。マーコール (*Capra falconeri*) は別名ネヅツノヤギとも呼ばれ、外側に向かってらせん状にねじれながら真っ直ぐ伸びている角が特徴的である。雌の角は25cm以下であるが、雄は最大1mにもなる。ヒンズークシュを中心とした山岳地帯に生存し、シベリヤ・アイベックスと似た習性もっている。しかし、角が大きくなりすぎて疲れやすく、自由度も失って外敵に狙われやすいといわれている。

最近江尻健二さんから珍しいヤギ属の写真を見せてもらった。ネパールのジャンボチェ近くで撮影したという。ヒマラヤ・タール (*Hemitragus jemulahics*) で、別名ヒゲナシヤギともいわれ、系統上は山羊や羊と違うタール属に分類されている。シッキムからカシミールに至るヒマラヤに分布している。ふさふさした体毛のなかから髭のない顔をのぞかせていて、非常にユニークな動物である。カラコルムにいるかどうかは定かではない。

カラコルムにいることが確実なマルコポーロ・シープも極めて珍しい動物の一つで、その生態はまだよく分かっていない。この貴重な動物の残骸を寺沢玲子さんはナガールで見たとという。

■カラコルムのロバ (ドンキー)

日本ではあまり見ることのないロバもカラコルムにはたくさんいる。ただしその分布は偏っていて、カラコルムとヒマラヤの中間に位置するナルタル谷やバグロット谷には大変多かったが、さらに北上したフンザ谷ではナガールの一部に多いだけで、東進したスカルド、フーシェ谷方面では全

体的に少ない。ナンガ・バルバット周辺も含めて、ロバの多い地域には森林が発達しており、どうやらこれら木材の運搬用に飼われているふしがある。粗食に耐えるロバは体格の割には負担力、持久力がある。疲れも見せず何時間も歩き、坂道や荒地では馬より勝る。

馬に比べて体の小さいロバは別名ウサギウマともいわれていて、耳が非常に長く、尾の形は馬よりも牛に似ている。ロバは英語でドンキーと言い、愚鈍、のろまの代名詞のようにいわれてきたが、実際に目の前のロバを見ると大変に可愛らしく、若干うれいをおびたやさしいその眼は一度見たら忘れられない印象を与える。また、母ロバにびったり寄り添って離れないロバの子供もひどく愛くるしい。

人間の命令に忠実に従うので大変やさしい動物かと思ったら、事実はどうも違うようである。仲間同志で荒く体当たりしたり、他のロバや雌ロバを見つけると、実に奇妙な声をあげて追いかける。一見従順でおとなしいロバが、断末魔の悲鳴に近い裏声で、いかにも苦しうに何回も鳴き続けるその声には全く驚いてしまう。ロバをコントロールする人間の掛け声もまた独特である。半分怒ったような、半分しった激励調の声をだすにはやはり年期があるようである。バグロット谷のトレッキングでは、このロバで荷物を運んだが、御者の声にロバの声が重なってまことに騒々しい旅であった。

カラコルムにいるロバは完全に運搬用のみ使われていて、ロバの肉を食べたという話は耳にしなかった。イスラム教国ではロバや馬は豚と同様



▲バグロット谷のトレッキングに使用したロバ

に食べるのは禁止されているという。ロバの乳は牛乳より糖分が多く、チーズ分が少ないので栄養価が高く、食物としてより薬用に多く使われるといわれるが、カラコルムでの利用は不明であった。

パキスタンの農村地帯では荷物運搬の行き帰りに人々はよくロバに乗るが、カラコルムでは人が乗っている姿をあまり見かけない。一度ナルタル谷で、鞍もつけずに早足で巧みにロバを乗りこなす光景を目撃した。しかし、サラブレットの優雅な走りに比べればだいぶ見劣りするのさげられない。ロバはやはり重荷を背負ってとぼとぼ歩くのが様になっている。

家畜ロバの祖先は、今は絶滅しているアフリカ産の野性ロバといわれている。18世紀末頃から家畜ロバが世界的に広まったが、パキスタンにいる家畜ロバはマラック種という最小の品種で、肩幅は75cmくらいしかないが、小さい割には多くの荷物を運ぶ。おそらくエジプト経由で入ってきたものと思われる。一方、クンジェラブ国立公園にはアジア産の野性ロバ、アジアノロバ（別名クラーン）が住んでいる。その中でもカラコルムをふくむ中央アジアのクラーンはゴーカーといわれている。非常に用心深いので、なかなか見られない。ゴーカーは馬に匹敵する走力を持ち、ゴビ砂漠での観察では時速64kmで2時間も走り続けたと言う。

野性ロバも家畜ロバも長生きで、20年から40年、長いものは80年も生きたという長寿の動物である。ロバの雌と馬の雄を掛け合わせて、ラバという動物が誕生している。ラバは山岳や砂漠での荷役によく使われているが、カラコルムで使われているという話は聞かなかった。

■野性のニワトリ（ワイルド・チキン）

緑の少ないカラコルムであるが、その割に鳥の種類は豊富である。その理由の一つはカラコルムが渡り鳥の中継地になっているからである。1996年6月のウルタル谷では、特に真っ黒い九宮鳥（ウルドー語でチョコ、バルチ語でチョルカーと呼ぶ）が群れをなして4000m近くを飛んでいるのが目についた。この鳥は西部のバルチスタンにも多いが、不思議なことに現地の人がいくら探しても巣が見つからないという。恐らく断崖、絶壁の

上に巣作りをしているのであろう。4200mのホン峠の岩場にはコンドルの羽が落ちていた。その大きさからほぼ全長2mに達する大鳥（ヒマラヤン・グリフォン・バルチャー）であることが分かった。目の前で、鷹（ウイング・ホーク）が小鳥を捕らえて飛ぶシーンも目撃された。いわゆる森のカラスといわれる真っ黒なハシブトガラス（ジャングル・クロー）もカラコルムに多い。

このカラスの仲間でビッグ・クローと呼ばれる大型の鳥はすこぶる攻撃的で、人を襲うこともあるという。かつて、バルトロ氷河を登っていたマチュルー出身のガイドはこの鳥に遭遇し、黒い稲妻のように空の上から急降下してきて顔をかすめ、それからくると反転して上昇した。追い払っても払っても何度も飛んできて襲ってきたという。話を聞いている私のほうが、ヒッチコックの名作映画「鳥」の場面を思い出して冷や汗がでた。この鳥はおそらくワタリガラスの一種（ノーサン・レイバン）と思われる。普通のカラスより四倍近い体重を有し、くちばしの長さも10cmになんなんとする。本来死肉を食べるが、時には生きている羊の眼を襲い、獲物をくわえた猫をおどして横取りする。それどころか、恐ろしいオオカミにさえ空中からいたずらをすると報告がある。なわばりをしっかりかまえて、侵入する鳥は追い払うというから、ガイドも侵入者と見なされたのかも知れない。ちなみにワタリガラスの知能はハトやニワトリよりもはるかに高くて犬に匹敵し、1から5ないし6くらいまで数えられるという。

カラコルムの鳥の中で最も印象的だったのが野性のニワトリ、ヤケイ（野鶏、別名ヤブニワトリ）である。英語でワイルド・チキンまたはジャングル・ファウル、ウルド一語でチャコール、バルチ語でゴングモーという。ニワトリ自体は世界中どこにでもいるので格別珍しくはないが、野性のニワトリがカラコルムにいと聞いて大変興味があった。地元ガイドの説明によると、ワイルド・チキンはカラコルムの広範囲に生息しており、体型は飼っている家ニワトリそっくりであるが、美しく輝いた灰色の羽を持ち、腹部は白く、大きさは体重3kgから4kgに達するという。鳴き声は家ニワトリとはかなり異なるようだ。飛翔力は家ニワ

トリよりはるがあるが、それでもせいぜい30m位の距離を飛ぶだけで、大空高く舞い上がるわけではない。この点で日本の雷鳥に似ている。ただし雷鳥と異なって夏と冬で羽の色が変わることはない。

ワイルド・チキンは朝と夕刻に群れをなして採食する。現地の人の貴重な蛋白資源になっているが、さすがに野性の鳥である。視聴覚が鋭敏な上に、大変すばしこくて、卵から孵化して数日もたつと、現地の人でも絶対に捕まえないという。1996年のウルタル谷で偶然現地の牧童が捕らえたという二羽の雛を見せてもらった。卵から孵化して2日くらいというが、ひよこというよりウズラに似ていた。ゆずってこないかと言ったら、家に持ちかえて育ててから高値で売りたいという。ワイルド・チキンの卵は普通のニワトリよりも大きく、値段も高いという。ワイルド・チキンをとるためには、猟師は迷彩服を頭からかぶって飲まず食わずで半日くらい岩のように動かずに待つ。そしてやってきたワイルド・チキンを散弾銃で仕留めるのだという。この肉を御馳走になった日本登山隊の人の話ではすこぶる美味だという。ただし、最近は禁猟になったとも聞いている。

私は不幸にもまだワイルド・チキンの成鳥の姿を見ていないし、食べてもいないが、寺沢さんは1988年にバルトロ氷河末端で数匹のワイルド・チキンを目撃したという。糞は横に何本も筋の入った細長い形をしていて、すぐに見分けられる。かつてチャラクサ谷を登っていた時、アイベックスの糞に混じってたくさん落ちていたことを思い出した。巣は岩陰のくぼみに木の葉をうすく敷いて、



▲ウルタル谷で見かけた野性のニワトリのひな（生後2日くらい）

数個の卵を生むが、恐らく人の近づけない断崖の棚に巣作りをしているのであろうか、なかなか見つからないという。

文献を調べると、カシミール、ネパール、ブータンなどのヒマラヤ山脈沿いのインド北部から東南アジアにかけて、赤褐色の赤色ヤケイ（野鶏 英語でレッド・ジャングル・ファウル）と灰色の灰色ヤケイ（野鶏 グレー・ジャングル・ファウル）の二種類が住んでおり、このうち前者が世界の家ニワトリの祖先だとダーウィンが述べている。どうもカラコルムのワイルド・チキンはインドの西部や南部にいる灰色ヤケイの可能性が高い。灰色ヤケイは赤色よりも人に慣れやすいともいわれている。実際ウルタル谷で見た雛はアニマル・ライフ誌に載っていたヤケイの雛の写真にそっくりであった。

しかし、このことを野鳥観察家の山口光雄さんに話すと、彼がこの鳥はヒマラヤ・セッケイ（雪鶏 ヒマラヤン・スノー・コック *Tetraogallus himalayensis*）ではないかという。大型のヤマウズラであるこの鳥は、図鑑によれば体長75cm、体重3kg前後で、灰色の毛におおわれ、喉元と胸が白い。中央アジアの3900mから4600mの山岳地帯に生息し、特にギルギット、フンザ、バルチスタンを中心としたカラコルムに多いといわれる。ヒマラヤ・セッケイも群生し、フンザのミナピン氷河では一度に43羽が目撃されたと述べられている。高所の岩場をねぐらとして、早朝と夕方にガレ場を伝わって草地に下りてきてスゲなどをついばむ。人間がやっと息のできる高所でも驚くほど敏捷で、鷹に襲われてもうまく逃げおおせるという。めったに飛ばないが、窮地になれば山肌をものすごい音とスピードで飛びおりる。春の繁殖シーズンになると、雄鳥はちょうど人間の口笛に似た鋭い声で鳴き、3km先までとどくという。ヒマラヤ・セッケイについてのもう一つ興味ある記載は、この鳥がシベリア・アイベックスの居住地に好んで生息していることである。アイベックスはベンケイソウなどもよく食べるといわれるが、あるいは餌植物が似ているのであろうか。ヤケイ類は本来森林の鳥で、岩場を好むセッケイ類とは対照的である。これらの点を総合すると、どうもワイルド・チキ

ンはヒマラヤ・セッケイである可能性が高い。しかし、その一方で、すこぶる敏捷なこと、朝夕群れをなして採食すること、めったに飛ばないこと、木陰の凹地に茶色の卵を生むことなどは中国西南部で目撃された赤色のヤケイの習性に極めて近い。あるいは、この中国産のヤケイはヒマラヤ北部に生息しているチベット・セッケイ（チベタン・スノー・コック）の見誤りなのであろうか。

パキスタンにもかつて赤色ヤケイが存在していたとの報告がある。現在その再確認はされていないが、どこかに生き延びている可能性は否定できない。すべての原種がこの世から全く消失してしまった牛や馬などに比べると、キジ科ニワトリ属の赤色ヤケイ・灰色ヤケイは貴重な存在である。同じキジ科に属するセッケイとともに、カラコルムにおけるワイルド・チキンの今後の調査が期待される。

■おわりに

カラコルムを含む中央アジアの山岳地帯には実に多くの野生動物が住んでいる。ここに紹介したのはほんの一例で、かもしかに近いゴールルやジャコウジカ、ヒマラヤ熊、コビト猪、それに雪男など変化と謎に富んだ大型動物がいる。小型動物ではマーモット、トガリネズミ、それにトカゲの類が大変に多い。1m近い大トカゲがカラコルム・ハイウェイを横切ったのを見たことがある。日本ではあまり見られないこれらの野生動物に出会える（大抵は足跡か糞であるが）のも、カラコルム・トレックの楽しみの一つである。人のめったに近づけない辺境の登山をされるヒマラヤ協会の方々は珍しい動物に会えるチャンスが最も高い。情報をお持ちでしたら、ご一報をお待ちしています。

最後に動物についていろいろ教えて頂いた青年海外協力隊の山口光雄氏、情報を提供してくれたニッパ・トラベル社のガイド、モハンマド・サディークとアルミナル・ベイグ、日本ヒマラヤ協会の寺沢玲子さんと江尻健二さんに感謝する。なおユキヒョウの記事の一部はハムサファール（PIAのPR誌、1996年5・6月号）を、原種に習性についてはアニマル・ライフ（日本メール・オーダー社）の記事を参考にした。

ヤンラ・カンリ (7,429m) 偵察記

山森 欣一

■はじめに

ネパールと中国の国境近くにあるガネッシュ・ヒマールは、日本隊の記録も多く、また、カトマンズの空港からもよく見えることもあって日本人にとっては馴染みの山群である。ネパール側からは良く知られた山群であるが、1980年にネパールと中国の国境策定協議の結果、I峰南面のチリメ・コーラ右岸に国境線が引かれた。また、この時の協議によって、主峰であるI峰の名称は、両国共ヤンラ・カンリとなったのである。

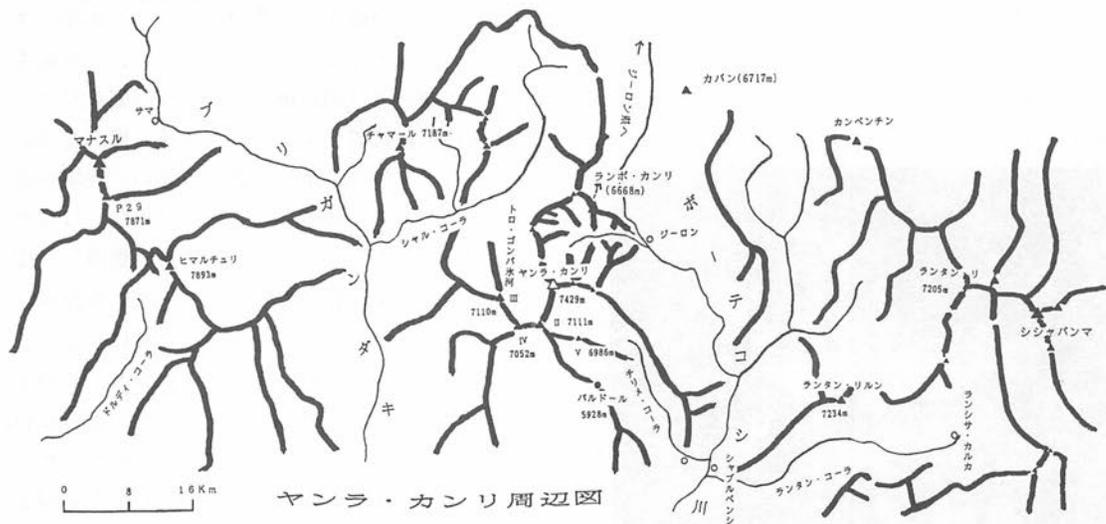
ヤンラ・カンリ峰は、この山群の主峰である。この山は、当時ヨーロッパ・アルプスやヒマラヤで活躍していた、スイスのレイモン・ランベールとフランスの女流登山家クロード・コーガンら3人によってネパール側の南面から55年春に初登頂されたが、その後40年間、頂は踏まれないまま静かに眠っているのである。

また、この山の北麓にあるジーロン鎮は、スキー

の名手でありアイガー北壁の初登攀者としても知られるドイツのハインリヒ・ハラー達が、ナンガ・バルバット登山終了後、第二次世界大戦の勃発によって捕虜となりながらも、収容所を脱走してチベットのラサへ逃亡の途上、越冬した場所として有名であった。

山群の主峰であること、山姿が立派であること、登場するヒマラヤ・ニスト達の彩り。中国側である北面に関する資料が無いこと、即ち未知の要素が濃いこと。87年に実施したチベットとの合同ラプチュ・カン (7367m) 登山の隊長であった成天亮氏から、合同登山の誘いがあった時、私は、躊躇せずにこの山に向かうことにした。

未踏ではなくとも40数年の登山の空白と未知のルートからの挑戦は、私達の心を高揚させるに充分だろう。本隊は97年春と決定。メンバーは双方8名づつ。96年に偵察を実施することで合意した。しかし、96年8月にラサに行ってみると、ヤンラ・



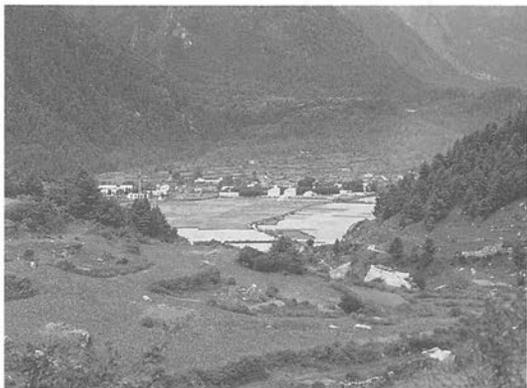
1996年3月 作図：山森 欣一

カンリ登山には、ティンリ高原からジーロン県に至る途中にあるマ・ラ（5234m）が4月半ばにならないと車が通れないことが判明した。これは大問題であった。

私は偵察のため成田から上海、成都を一日で飛び、9月26日にラサ（3658m）に入った。協議した結果、偵察行は、私と長野県山岳協会隊と合同で挑んだチョモラーリから下山したばかりの、チベット登山協会のガヤ（48歳）で行うことになった。通訳は無し。

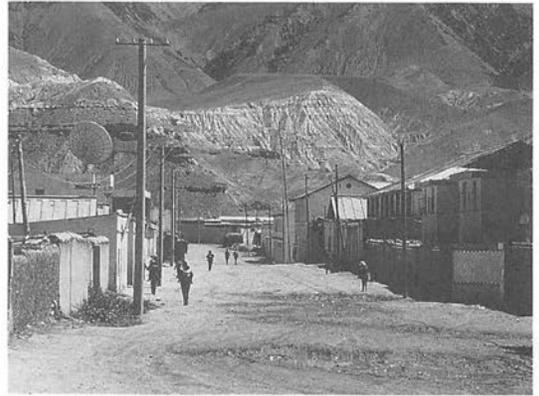
偵察のマスター・プランは、シガツェ、ラツェからティンリに至り、シシャパンマの北麓を通過してペグ湖からマ・ラを登り、ジーロン県に降りる。さらにジーロン川沿いにジーロン鎮まではジープが使える。少し戻ってルカからヤンラ・カンリ北面に食い込むラマ・プー川から氷河を探り、北面の登路を偵察。この面に登路が見出せない場合は、南面に回りチリメ・コーラの手前にあるラド・ラ（4632m）を越えて、サンジュン氷河まで偵察する、ということで合意した。

9月28日 9時気温12℃、トヨタのランクルでラサを出発。ラサの乾燥した気候のため私は既に喉が痛く鼻水がひどい。チベット第二の町であるシガツェへの道は三つある。一つは、北西に向かいヤンバージンまで行き、南西に下ってヤル・ツァンポーを渡る道。二つ目は、ヤムドクツォに至りニンチン・カンサ（7206m）の麓、カロ・ラ、ギャンツェを通過して行く道。三つ目が最も新しい道で、ほぼヤル・ツァンポー沿いに行く道。今回は最後の道をとる。峠を越える道とは違い、頭痛もなく快適である。ヤル・ツァンポーを左岸から右岸に



▲ジーロン鎮を見おろす

▼ジーロン県の街



渡る橋が工事中で、一方通行のため時間待ちがあったが、7時間半でシガツェ（3836m）に到着。この日はチベットン・ホテルに泊まる。外国人用のトイレもあり、旅行客も多い。

9月29日 8時9℃、8時過ぎに出発。3時間半でチャンタン高原への分岐点となるラツェ到着。5220mのジャツォ・ラを越える。シガールでパスポートのチェックを受けて16時過ぎにティンリ（4300m）に到着。冷たい風が短い通りを吹き抜けていた。それでもさすがは中国・ネパール友好道路の要衝、エヴェレスト・ビューホテルの待合室には暖かいストーブを囲んで各国のトレッカー達が、スーユ茶（チベット茶）やビールを飲みながら談笑していた。

この日はティンリ泊まりの予定であったが、50km先に良い泊場があるから、というガヤの言葉を真に受けて17時過ぎに公路を南に向けて出発。ホコリっぽい道を西陽を受けながら走り、1時間半でシシャパンマ（8027m）の巨大な山姿を見る。公路を西に離れてシシャパンマ北麓の轍を追う。カンペンチン（7281m）が意外に近い。西陽を追うように西進し、薄暗くなり轍も見えなくなった19時45分、とあるチベットンの集落に到着。一夜の宿を請う。中国製のカップ・ラーメンを食べ、スーユ茶を5杯飲み、トイレのため外に出ると、冷気の彼方に満点の星が降っていた。ベッドの上にシュラフを広げて寝る。咳とタンが止まらない。集落の名はセロン（色龍・4700m）と分かった。

9月30日 快晴の朝を迎える。夜中中タンが止まらずシンドイ。ジープのフロント・ガラスが凍っていた。8時半過ぎに出発し、広大なシシャパン

マの北麓をカンペンチンを見ながら走る。どこまでも続きそうな錯覚に陥る高原は既に秋である。広大な茶色に染まった高原の彼方にはシシャパンマ、ポーロンリ (7282m)、ランタン・リ (7205m) そしてカンペンチンへとまるで銀屏風を揚げたように白き山々が連綿と続く。岳人にとっては堪らない景観である。寒気を忘れる至福の一時を過ごす。右手にペグ湖が巨大な姿を現した。10時過ぎにはペグ湖と別れてマ・ラへの登りに入る。振り返って湖を見下ろすと真っ青な湖面の遙か向こうに、ラプチェ・カン山群があった。ハラーが「チベットの七年」で記述していることは正しかったのだ。(私は、ラプチェ・カン登山報告書の中の英文サマリーで、ハラーはカンペンチンとラプチェ・カンを間違えている、と書いた。この場で訂正したい。) 登り詰めると小さな高原に出た。なおも谷をジクザクに登り11時半待望のマ・ラに到着する。峠の標識には5700mと表示してあるが、明らかに間違いである。私の高度計は5180mを指していた。

眼前に中国とネパールの国境となるヒマラヤの山々が飛び込んで来た。感動の一瞬である。南に目を転じると二つの巨峰が見えた。氷河を抱えた大きな山がある。強い風の中、ジープのフロントに地図を広げて確認する。ヤンラ・カンリに違いない。(帰国後この山は北にあるカバン・6717mと判明した) 南は雲が少ないが西は雲が湧いている。感動を押さえ切れずに立て続けにシャッターを切る。

眼下にはジーロン県と思われる町が小さく見えた。峠から標高差で約1000m、1時間半下るとジー



▲ジーロン川には一本の鉄線と竹カゴが

▼ジーロン鎮を出て江村へ向う



ロン県 (4127m) であった。高原の中に作られた殺風景な町の印象である。陽射しの強い町の通りに人民政府の建物が立派である。弁公室という中国独特の役所でパスポートを登録する。官舎の屋根越しの澄切った空に、ハラーがチョグラリと呼んだ三角錐の美しい6514m峰が聳えていた。

昼食の後、道路管理者がいなくて一時間ほどロス。15時に南にあるジーロン鎮に出発する。砂礫の山々の間を一条の水流が走っている。これがジーロン川である。ヤル・ツァンポーの南の山々に源を発し、ネパール国内を流れてやがてガンジス川となりついにはベンガル湾に注ぎ込む悠久の川である。川底の左岸につけられた道をドンドン南下するが、道は細く車一台がやっと通れる程度である。幸いなことに対向車はこない。時折左岸から合流する支流の彼方には雪山が覗く。大岩壁の裾を巻き、扇状地を過ぎると見上げる大岩壁の中に僧院があった。ハラー達がジーロン鎮を目指している途中に立ち寄ったロング村のザガ寺でミラレパの僧院らしい。

いつしか周りには樹林が多くなり平坦地に出る。ここで雲間に浮かぶヤンラ・カンリを初めて見る事ができた。(山と渓谷2月号には、このように書いたがその後の調査で、この山群はランタン・リルン (7234m) の西面であることが確定した。ここに訂正しおわびしたい。) 大きな山塊であり素晴らしい景観である。18時40分ジーロン鎮 (2795m) に着く。周りは樹林等で高原にある県とは全く違う雰囲気なのだ。眼前にはヤンラ・カンリから東に延びた稜線上にあるブヨン (6676m) と美しくも険しい山容のランポ・カンリ (6668m)



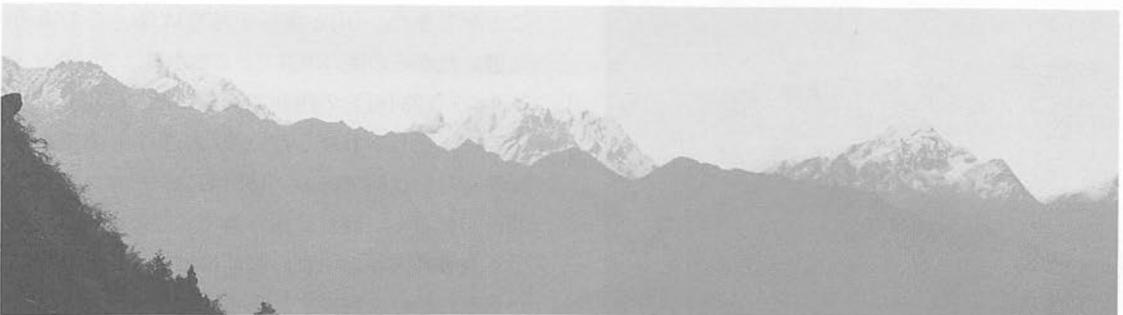
▲マ・ラの途中からペグ湖をはさんで見るラプチェ・カン山群（中央が主峰）



▲マ・ラから南に聳えるカバン（6717m右）と無名峰（左）



▲マ・ラから中国、ネパール国境の山々（右端がチョ格拉リ6514m。その下手前がジーロン県）



▲ジャゾンガ上の山稜から見たランタン・ヒマール、ナヤ・カンガ周辺の山々

が聳え立っている。ジープの旅はここまででおしまいである。

ここで地元の責任者から情報を収集する。予定しているルカからヤンラ・カンリ北面には道が無いという。迷った末、今回は偵察日数が少ないため南面の偵察を行うことにする。また、ジエロン県から鎮まで、今我々が下って来た道路は、5月にならないと安心して通れないという情報も寄せられた。明日は4人のポーター（中国では民工という）を雇うことを決めて遅い夕食をとる。招待所に戻り布団に潜り込んで寝ていると、22時半に公安（日本の警察）4人が大型犬を連れてやって来てパスポートをもっていかれた。なんてこった！これだから中国は嫌われるのだ。

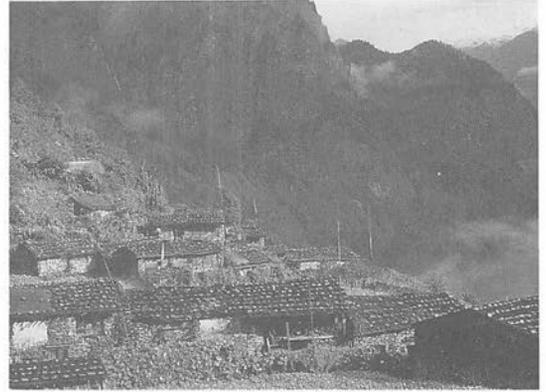
10月1日 朝食をしていると昨夜の公安が来る。とりえず国境を警備する辺防隊に出頭するためにぬかるんだ町中の道に行く。行っては駄目だ！許可がある！の押し問答が始まる。中国製の地図を見せて説得するが埒があかない。その地図は偽物だ！とまで云う。時間をかけて地形の説明をする。1時間ばかりで漸くOKが出る。最後は国境近くでネパールがうるさいから写真を撮るな！と云われる。写真を撮りに来たのですよ。パスポートは返してくれない。これから5日間ノン・パスポートの旅が始まった。

10時半、運転手のガーサンに見送られて、曇り空のジエロン鎮を後にする。黄色く色づいた田圃の中を過ぎ、樹林帯の中につけられた小道を下ると、工事中の車道に出た。ジエロン川の左岸にネパールへ抜ける車道を作っているらしい。遠くから盛んに発破の音をする。ジエロン川を眼下に見



▲山稜上の憩い（ポーターと左に山森）

▼のどかな江村（ジエロン川右岸）



ながら所々高巻をしながら作られたばかりの車道を下る。硬い岩壁を発破で崩している現場では、その下をトラバースする。こけると400m下に逆巻くジエロン川に真っ逆さまに落ちて行く場所だ。車道の工事に従事しているのは100人近くいて、狭い道路に分宿して担当していた。何時の日にか、ネパールのシャベルベンシ当たりからジエロン鎮に車で入る日が来るのだろう。

ジエロン鎮を出て5時間、標高差で約770m下って右岸に渡河する標高2026mの場所に着いた。かつては橋が架かっていた残骸があるが、今は対岸に一条の鉄線が固定してあり、竹で編んだ籠がぶら下がっているだけだ。その籠の両側に麻のような紐が繋がれていた。対岸に一軒の家があり、ポーター達が大声で叫ぶとチベット服を来た老婆が出て来た。すかざすポーターは手を挙げて盛んにお金を数える真似をする。しかし、老婆は帰れ！帰れ！と身振り手振りで繰り返す。ポーターも負けじと金！金！と叫び、とうとう根負けした老婆が籠の紐引く。三人目で紐が切れるハプニングがあったものの、一時間ほどで6人の荷物が無事川を渡った。

一休みして20分ほど急登すると、標高2400m付近の斜面に東側に開けた狭い台地があり、そこがこの付近では一番大きな村であるジャゾンガであった。一軒のチベット人の家に世話になる。二階が囲炉裏とベット二つの居間である。フト囲炉裏の側にいる老婆を見ると顔の下に顔に迫るような大きな瘤があった。早速スーユ茶攻めに合う。契めてくれるのは鄙には稀な若い娘であった。しかし、チベットには度々来ているが、これほどのスーユ

茶攻めに合ったのは初めての経験である。夜半から雨となった。

10月2日 9時半曇り空の中、村の裏手の樹林帯の中をグングンと登り高度を上げて行く。眼下には折り重なるように延びている尾根が見えるがその狭間に、ネパールとの国境の橋があるらしい。その尾根の向こうには雲間にランタン山群と思われる山々が見え隠れしている。高度が上がるにしたがって太いシャクナゲの木が多くなり、所々樺の木もあり相変わらず竹林が多い。暫く尾根道を行くが、14時半頃から雨が落ちて来た。16時半今日の最高所である標高3970mに着く。17時頃から岩壁の弱点を縫うようにして作られた急降下の道となる。川を挟んだ対岸にはラト・ラに続く斜面がみえている。幾つもの支流がありその都度登り降りを通り返し、岩壁をトラバースするような形で、徐々に高度を下げ19時に川の上流に降りた。今日の泊場だ。標高約3530m。雨の降る中、ポーター達が流木を集めて上手に火を焚く。日本酒を振舞い一日の疲れを癒す。

10月3日 早朝二度激しい雨がテントを打つ。東のネパール側は晴れ間も見えるが、ラト・ラ方向は厚い雲の中である。8時気温8℃。この天候ではラト・ラに行ってもヤンラ・カンリを見ることは不可能なので今日は停滞することになるが、偵察の使命を帯びているギャは峠に行きたいという。9時過ぎ二人のポーターを連れてギャは出発した。雨が降ったり止んだりしているが、晴れ間にはランタン山群の山が三つほど顔を見せて呉れる。16時半過ぎから激しい雨が二時間ほど続き、一時間止んだ後再び本降りとなった。この天候で



▲山稜風景

▼山稜風景（上がネパール方向）



は上は雪に違いない。

10月4日 一晚中降雨に見舞われる。間断無く降る雨の中、9時過ぎに一人でジャゾンガに向けて出発。樹林帯の中で放し飼いにされていた巨牛の群れや孔雀のような大きな鳥に驚きながらも、15時半雨に煙るジャゾンガに到着。チベットの家に入り濡れ物を乾かす。スーユ茶もさることながら冷えた身体には、暖かいツァンパ酒がいい。一時間遅れでギャも到着。それから二時間してポーター達がずぶ濡れになって帰って来た。タルカリーを御馳走になり、雨で疲労し睡魔に襲われ眠りこける。夜半気が付くと、炉端の周りでは大宴会の真っ最中でありとうとう一節と一舞いする羽目となった。

10月5日 雨は相変わらず本降り時間で待ちとなる。それでも漸く小振りになった。雨上がりの中にチベット独特の幟をはためかせた屋根が美しく映えている。この村は全部で19戸あるという。

11時少し前に漸く出発となる。この家の美女は私のジープでラサまで行くことになり、父親からハタと呼ばれる白い布を掛けてもらった。村の男達も特産品の竹箆を幾つも背負ってジーロン鎮へ売りに行く。雨の中、箆で渡河し車道を歩くが、この三日間の降雨で到るところ決壊しており、その都度高巻をして通過。車道の始まる地点であったかいチャイを3杯飲んで一息つき、頭から足の先までずぶ濡れになり、17時過ぎにジーロン鎮に到着し、5日間のノン・パスポートの旅を終えた。

10月6～8日 昨日までの雨が嘘のように真っ青な空が広がった。ジーロン鎮の公安家族3人がパスポートと引き換えにジープに乗り込み、はち

切れんばかりになりながらマ・ラを越え、ティンリ、シガツェと泊まって8日ラサに帰着。こうして咳と嘔と雨に悩まされた偵察は終わった。

結局、協議の結果、ヤンラ・カンリ登山は困難との結論となり、合同登山の目標はブータンとの国境近くにあるクーラ・カンリⅡ峰(7418m)となったのである。

■おわりに

シシャバンマからカンペンチンに続く銀屏風の稜線は、未踏峰の宝庫である。標高も6500m前後と手頃であり、山姿もユニークなものが多かった。足の便も良く、多分ジープを降りた所がBCになるだろう。ハイ・キャンプは二つあれば登頂可能と思われる。放射状登山にも向いている。

マ・ラを越えてジーロン県を足場にネパール国境の山々も面白い。小振りではあるが静かな山登りが楽しめそうである。

カバン峰は山姿も堂々としており、山群の主峰でもあり、七千メートル峰に劣らない魅力に満ちた山である。この山の山頂からマナスルやアンナプルナを見ることを想うだけで心が踊る。

▼江村で世話になった家族



西にも東にも未知の山域が眠っていて、心ある岳人の訪れを静かに待っている。

— H A J 30周年記念行事資金協力をお願い —

H A J は、本年創立30周年を迎えることになりました。これを記念して幾つかの行事を計画致しております。これらの行事にかかる費用につきましては、極力外部資金の導入などを計って賄う予定ですが、会員の皆様にも資金のご協力を仰ぎたく、ここにお願ひ申し上げます。概要につきましては次号「ヒマラヤ」紙上にてお知らせ致します。

東京新聞の本

山の情報誌 岳人



毎月15日発売(隔月発行) 定価670円

■本誌の年間購読ご案内

本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。

直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からとお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。

郵送料は通常号116円、特大号124円です。年間購読料は8,480円で送料は当社負担です。お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

97年	第1特集	特別企画
★1月号	日本の雪山大作戦	南米インカ・トレイルに行く
2月号	富士見十三州の山	春のフンザとバルトロ氷河
★3月号	山スキー大滑降	ネパールの夢のトレッキング
4月号	アルプスの雪稜	初夏のロッキー特選コース
★5月号	花と森の山旅	中部の山岳会と奥美濃の山
★6月号	私の花の名山	創刊50年 世界のアルピニストたち
★7月号	今から間に合う海外の山	仙台のクラブ、東北の沢に行く
8月号	みちのくの山と沢	屋久島の緑深い峰々と人
9月号	修験の山は名山	山の達人と訪ねる秋の北海道
★10月号	紅葉の山、尾瀬と南会津	撮影クラブと秋の大峰山脈へ
11月号	晩秋、湯けむり紀行	フリークライミング天国・岡山
12月号	身を守る雪山技術	冬の奥秩父に生きる山人たち

(★は 特大号となります)

東京新聞出版局 (中日新聞) 〒108 東京都港区港南2-3-13 ☎(03)3740-2674
 (東京本社) 書店で発売中。中日新聞販売店でも取りつぎます。

地域ニュース

《ネパール》

チャンド氏首班に

ネパールの統一共産党など3党は3月10日、国民民主党的ロケンドラ・バハドル・チャンド氏(58)を首班とする連立政権を樹立する意向をビレンドラ国王に伝えた。

同国では3月6日、ネパール会議派を中心とするデウバ前政権が自ら提案した下院での信任獲得に失敗、デウバ首相が退陣していた。

下院(205議席)で90議席を占める共産党は、国民民主党(19議席)からの10議席などで計103議席と単純過半数を辛うじて得たにすぎず、新政権が発足しても政局の安定には程遠い。(東京新聞)

ネパール大使に柳瀬氏

在ネパール日本大使に柳瀬友彦氏(60)が就任した。95年2月から広州総領事。

《中国》

中国領ヒマラヤ日本隊1997年

山名	標高	派遣母体	隊長名	数
チョモランマ	8848	亜細亜大	野口 健	4
クーラ・カンリⅡ	7418	H A J	山森欣一	7
ニンチン・カンサ	7206	H A J	天城 敏彦	12
リスム	7050	労 山	近藤和美	7
チョム・カンリ	7048	中央大学	黒川 恵	8
ミニヤ・コンカ	7556	札幌山岳	芳賀正志	7
〃		横断山脈	須藤建志	7
ムスターグ・アタ	7546	H A J(女)	市川春代	6
〃		芝浦工大		9

※この他に長山協から2隊が登山を予定している。

ダライ・ラマ訪台反対

中国外務省は、ダライ・ラマが3月に台湾訪問を計画していることについて反対の立場を表明。

《パキスタン》

昔は島だった高地コヒスタン

パキスタンと日本の共同研究で、インド亜大陸と現在のユーラシア大陸の間には、日本列島のような細長い島が存在していたことが初めて明らかになった。

パキスタンからインド北部には、ヒマラヤ山脈とカラコルム山脈が走っている。両山脈の間に、地質学的にはまったく別の「コヒスタン」という地域がある。コヒスタンは現地語で「山の国」。長さ300km、幅数10kmの広さだ。首都イスラマバードから車で北へ1日半。コヒスタンは、どういう経過をたどってここに入り込んだのか、専門家の関心を集めていた。

両大陸の衝突の様子を探る研究は、1980年ごろから、次々に新しい成果が上がっている。中国・チベットやパキスタンなどの国々の情勢が変わり、欧米や日本の研究者の現地調査が可能となったためだ。衝突による大陸の変形の痕跡は、東は中国雲南省、西は旧ソ連のタジキスタン共和国までの広範囲で確認されている。

最近では、南シナ海や日本海が出来たのも、両大陸の衝突が原因とする学説も提唱されている。

(1997.3.12(タ)・読売新聞)

新閣僚決まる

パキスタンのナワズ・シャリフ首相は、新閣僚6人を発表した。外相には故アユブ・カーン大統領の息子のゴハル・アユブ・カーン氏が就任、蔵相にはシャリフ氏の前政権時代に蔵省を務めたサルタル・アジズ氏が再び起用された。このほか、商務相にモハマド・イシャク・ダル氏、国務相にはアシュガル・アリ・シャー氏が就任した。

トピックス

第4回 H A J 事故対研開催

3月23日、第4回目となるH A J主催の「高所登山事故と環境対策研修会」が東京池袋で開催

された。当日午前中は「雪崩」について事故例の紹介や体験者の報告が行われた。午後に入り、その他の事故の内、「肺水腫」「八千メートル峰の死亡事故」「クレバス転落」を中心に2時間研修が行われた。最後に環境対策として「テイクイン、テイクアウト」の方法論について具体的な例を挙げて研修が行われた。資料集として268ページの大冊が配布され、会場では山と溪谷社から出版された「生と死の分岐点」が格安で販売され、参加者から好評を博し、これで3千円は安い！との声が上がっていた。(参加者32名)

第35回日山協海登研開催

2月22日～23日の両日、恒例の日山協海登研が八王子の大学セミナーハウスで開催され、過去最高の約140人が参加した。

ヒマラヤン、ソロクライミングでは、戸高雅史、細田一郎、山野井泰史の各氏から経験談が披露されたが、ポーランドのポitek・クルチカ氏が特別参加して、スライドショーを行った。山田、斎藤、吉田のH A Jトリオと合同で登攀したトランゴ・タワーの映像も紹介された。

翌日は、岩崎洋、野沢井歩、船尾修の各氏が、「超経済的登山」の実践について報告。

登山隊報告は、ラトナ・チュリ(信大)、チョモラーリ(長山協)、飛び入りで韓国の登山が紹介された。

尚、中国登山協会から曾曙生主席、楊世涛交流部副部長、趙建軍同副部長も招待され、中国登山の現状について曾主席が報告。曾主席は其中で、「北朝鮮」に登山協会が設立されたことを紹介された。

第3回横断山脈研究会を開催

中国四川省・雲南省・チベット自治区にまたがる横断山脈を、登山だけでなく総合的に調査・研究することを目的として横断山脈研究会は発足した。3月8日～9日の第3回研究会では、伊東市に会員約30名が集い、「梅里雪山」をテーマに情報の交換や発表を行なった。H A J会員の中村保さんが同山一周巡礼道の報告を、また日中合同登

山隊の吉村千春さんがその記録をスライドを使って再現した。問い合わせ先=075-212-1320まで。

Books

ギシリック・ターク初登頂

山形県山岳連盟が、1995年夏に中国、崑崙山脈に派遣した登山隊の報告書・ギシリック・タークは西部コンロンの庫台克力克山群の主峰で標高6,488m。未踏の地へ足を踏み入れた岳人のとまどいや、感動など報告されているが、中でも今野一也副隊長の「登攀」の報告は参考になる。岳連隊らしい大冊である。

A 4版 183頁。内カラー32頁

彼ら「挑戦者」

—新進クライマー列伝—

大蔵喜福が、1994年～96年まで2年半にわたって「岳人」に連載した《無償の登攀—新進クライマー列伝—》をまとめたもの。採録されているのは、志水哲也、松葉桂二、名塚秀二、平山ユージ、山野井泰史、遠藤由加、清水修、伊藤達夫、松平盛亮、中島俊弥、岩崎洋、長尾妙子、山本篤、田辺治、野口健、渋谷英明、南裏健康、田中幹也、治田敬人、山本正嘉、戸高雅史、杉野保・千晶、松原尚之、小西浩文。

A 5版 319頁 東京新聞出版局 1,400円

東京集会のお知らせ

日時 4月21日(月)午後7時
場所 H A Jルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)
又は、J R大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

■財政支援：2万円(滝田収)

インドの祝祭日

期 日	名 称	内 容
☆ 1月 1日(水)	New Years Day	元旦
月14日(火)	Makarasankranti/Pongal /Makradi Sanana	ボンガル(収穫祭)。太陽が北半球に入る。
☆ 月26日(日)	Republic Day	共和制記念日(1950年インドが共和国となる)。
2月 9日(日)	Idu'l I Fitr(Ramazan Id)	イスラム断食月ラマザンの終わり。
月11日(火)	Vasant Panchami /Sri Panchami	春の始まりを祝う北東インドの祭。サラスワティ女神を祀る。
3月 7日(金)	Maha Shivratri	シヴァ神が祀られ、信者は1日断食する。
24日(月)	Holi	ホーリー。クリシュナ神を祀る。人々は年齢、カースト、宗教を問わず、色水をかけあう。
☆ 28日(金)	Good Friday	キリスト受難祭。
4月10日(木)	Gangaur	ガウリ女神を祀るラジャスタンの祭。
13日(日)	Vaisakhi	ヒンドゥ暦の元旦。パンジャブ地方の祭。
☆ 18日(金)	Idu'z Zuha(Bakrid)	予言者アブラヒムが息子を犠牲にした記念。
☆ 20日(日)	Mahavira Jayanti	ジャイナ教開祖マハビーラ生誕祭。
☆ 5月18日(日)	Muharram	イスラム暦の新年。イスラム教シーア派の哀悼の儀式。
22日(木)	Buddha Purnima	釈尊生誕祭。
7月 6日(日)	Car Festival(Ratha Yatra)	オリッサ、ベンガル、グジャラート、タミルなどでジャガンナート神を祀る。
☆ 7月18日(金)	Milad-un-Nabi	予言者モハメッドの生誕祭。
☆ 8月15日(金)	Independence Day	独立記念日(1947年独立)。
8月18日(月)	Raksha Bandhan	ラッキー。ヒンドゥの姉妹達は兄弟達の手首に神聖な紐を結び、兄弟達を悪から守る。
8月25日(月)	Janmasthan(Vaisnava)	クリシュナ神生誕祭。
9月 6日(土)	Ganesh Chaturthi /Vinayaka Chaturthi	学問と繁栄の神ガネッシュを祀る。
14日(日)	Onam	ケララの収穫祭。
☆10月 2日(木)	Gandhi Jayanti	マハトマ・ガンジー生誕記念日。
10月11日(水)	Dussehra/Durga Puja	ダサラ。ラーマ神が魔王ラーバナに勝利した事を祝う。
~18日(土)		ベンガルではドゥルガ女神を祀る。
☆ 30日(木)	Dimali	デワリ。ヒンドゥ教の新年。ヴィシュヌの妃神・富の女神ラクシュミーを迎える光の祭。
☆11月14日(金)	Gurru Nanak Jayanti	シーク教開祖ナナク生誕祭。
	Pushkar Fair	アジメール地方プシュカル湖で開かれるラクダ市。
☆12月25日(木)	Christmas Day	キリスト生誕祭。

インドは太陰暦のため祝日は毎年変わる。

☆インド大使館休館日

パキスタン登山隊1997年

山名	標高	国別	隊長名	人数	期間
K 2	8,611	パキスタン(独立50周年記念)	Lt. Col.(Retd) Manzoor Hussain	12	5/ 10~ 90日
ガッシャーブルム I	8,068	韓国	Hyun-ok Ji(Miss)	5	5/ 11~ 90日
ブロード・ピーク	8,051	静岡市山岳連盟	松永義夫	12	5/ 12~ 90日
ブロード・ピーク	8,051	群馬県山岳連盟	後藤文明	7	5/ 15~ 90日
ガッシャーブルム II	8,035	同上	上		
ブロード・ピーク	8,051	群馬県山岳連盟	佐藤光由	7	5/ 15~ 90日
ガッシャーブルム I	8,068	同上	上		
ガッシャーブルム I	8,068	群馬県山岳連盟	名塚秀二	7	5/ 15~ 90日
ガッシャーブルム II	8,035	同上	上		
ガッシャーブルム II	8,035	U.S.A	Fred Barth	5	5/ 15~ 90日
ナンガ・パルバット	8,125	韓国	Pack Sang Soo	5	5/ 15~ 90日
K 2	8,611	スペイン	J.Ramon Aguirre	7	5/ 15~ 90日
ナンガ・パルバット	8,125	韓国	Kye Joong Yoon	5	5/ 15~ 90日
ブロード・ピーク	8,051	スペイン	Robert Soler Rich	5	5/ 15~ 90日
ナンガ・パルバット	8,125	チーム84	沢田 実	5	5/ 19~ 90日
ナンガ・パルバット	8,125	関西登高会	梶浦正教	8	6/ 1~ 90日
マッシャーブルム	7,821	スペイン	Manuel Miranda Rodriguez	7	6/ 1~ 60日
ガッシャーブルム I	8,068	イギリス国際隊	David Hamilton	10	6/ 1~ 90日
ムチュ・チッシュ	7,453	スペイン	Luis Miguel Lopex Soriano	4	6/ 1~ 60日
トランゴ・タワー	6,231	U.S.A	Walter Barker	5	6/ 4~ 60日
ガッシャーブルム I	8,068	JFMA	常陸民生	5	6/ 5~ 90日
ラトック-II	7,108	ドイツ	Alexander Huber	14	6/ 7~ 60日
バインダー・ブラック	7,285				
トランゴ・タワー	6,237	スウェーデン/ノルウェー/スカンジナビア	Jan Stenstam	5	6/ 8~ 60日
ガッシャーブルム IV	7,925	スペイン	Miguel Angel Rodriguez	2	5/ 17~ 60日
プーパラッシュ I	6,824	北九州カラコルム登山隊	成末洋介	5	6/ 10~ 60日
チョクトイ	6,000	イギリス	M.Guy H.Villett	5	6/ 14~ 60日
ブロード・ピーク	8,051	U.S.A	William Thor Kieser	20	6/ 15~ 90日
ガッシャーブルム II	8,035	イタリア	Jiri Nova	5	6/ 15~ 90日
ガッシャーブルム II	8,035	G登攀クラブ	藤原拓夫	5	6/ 10~ 90日
ガッシャーブルム I	8,068	韓国	Lee In-Jung	5	6/ 15~ 90日
ナンガ・パルバット	8,125	U.S.A国際隊	Carlos P.Buhler	5	6/ 15~ 90日
ブロード・ピーク	8,051	U.S.A	Michael Steven Marolt	5	6/ 25~ 90日
ブラルン・サール	7,200	ポーランド	Zurawski Jareseaw	12	6/ 28~ 60日
ガッシャーブルム II	8,035	スピダーニェ同人	坂原忠清	2	7/ 10~ 90日
スパンティーク	7,027	スペイン	Pedro Vdaondo	6	7/ 3~ 60日
スキルブルム	7,360	神奈川ヒマラヤンクラブ	広島三朗	15	7/ 11~ 60日
ナンガ・パルバット	8,125	日本/パキスタン	細田一郎	2	7/ 21~ 90日

山名	標高	国別	隊長名	人数	期間
マルピティン	7,453	スイス	Dieter Fünfshilling	4	7/23~60日
ディラン	7,257	豊橋山岳会	中山秀樹	5	7/18~60日
スパンティーク	7,027	フランス	Daniel Petraud	5	7/30~60日
K2	8,611	JAC東海支部	徳島和男	10	5/15~90日
ガッシャーブルム IV	7,925	韓国	Sung Dae Cho	5	5/10~60日
グレート・トランゴ	6,286	韓国	Lee Sang-Cho	4	6/29~60日
フンザ・ピーク	6,230	U-TAN CLUB	宮地由文	7	7/21~60日
ラトック I	7,145	U.S.A	Mark. A.Richey	4	7/12~60日

《資料提供：ヒンドゥークシュ・カラコルム研究会 シルクロード・ツアーサービス》

ネパール登山隊1997年春季

山名	標高	国別	隊長名	人数	ルート
エヴェレスト	8,848	ノエビア化粧品	大倉 昊	12	南東稜
エヴェレスト	8,848	カナダ	Steven W. Matous	5	南東稜
エヴェレスト	8,848	イギリス	Simon Lowe	12	南東稜
エヴェレスト	8,848	アメリカ	Randy Todd Burleon	7	南東稜
エヴェレスト	8,848	インド(独立50周年記念)	Hrishikesh Nanda Yadav	5	南東稜
エヴェレスト	8,848	インドネシア	Rochadi	12	南東稜
エヴェレスト	8,848	ブラジル	Roberto Linsker	3	南東稜
エヴェレスト	8,848	イギリス	Peta Watts(Ms.)	12	南東稜
エヴェレスト	8,848	ニュージーランド	Guy Cuttor	7	南東稜
エヴェレスト	8,848	マレーシア	Nor Ramile Sulaiman	5	南東稜
カンチェンジュンガ	8,586	スロヴァキア	Jaromir Stejskal	11	北壁
カンチェンジュンガ	8,586	スイス	Norbert Joss	8	南西稜
ローツェ	8,516	イタリア	Agostino Dapolenza	11	サウスコル經由
マカルー	8,463	ロシア	Serguei Efimov	10	西壁
ダウラギリ I	8,167	スペイン	Luis Corlos Glez de MATAUCO	7	北東稜
ダウラギリ I	8,167	ギリシャ	Loannis Katrivanos	12	北東稜
ダウラギリ I	8,167	オーストラリア	Zac Zaharias	9	北東稜
ダウラギリ I	8,167	スイス	Kobi Reichen	2	北東稜
ダウラギリ I	8,167	ガイアアルパインクラブ	小西浩文	4	北東稜
バルンツェ	7,129	イタリア	Paolo Giachini	5	南東稜
ゲミゲラ	7,350	イギリス	P.H.Parsons	12	南西稜
ヒムルン	7,126	フランス	Jean Paul Bouqueir	7	北西壁
パトランシ	6,450	大阪山の会	吉永定雄	6	北壁

《資料提供：コスモ・トレック》

※表にはないが、ガイアアルパインクラブ隊(隊長小西浩文)がローツェ(8,516m)に入山する。

ネパール現地での手続き概要

ネパール入国

関西空港の開港により、ロイヤル・ネパールがカトマンズへ直行便を就航させた。早朝に羽田をたちその日の夜にはカトマンズに入ることができるようになった。しかしながら以前からのバンコック、香港経由も色々キャリアや出発曜日を選べるという利点がある。またそれら都市にてトランジットする航空会社を利用する場合は、24時間以内のトランジットに限り預けた荷物はカトマンズまでダイレクト送りにすることが出来るので、チェックインする際にその旨をカウンターにて申し入れるとよい。

ーカトマンズ・トリブヴァン空港にてー

空港に到着したら入国審査を受ける。ネパール入国の際にはビザが必要となる。しかし何かとトラブルの多い他のヒマラヤ諸国と違いネパールの場合観光ビザで入国し、その後で正式にエクスペディションのビザを取得する事が出来る。

観光ビザの取得方法だが、まず日本のネパール大使館にてあらかじめ取っていく方法。もうひとつは、カトマンズの空港にて取得する方法がある。しかし出発前の慌ただしい時期に大使館に向いたりビザ代金が多少割高な事を考えると、空港にて取得するほうが簡単である。イミグレーション・フロアーに置いてある、ビザ申請用紙に所要事項を書き込み、顔写真1枚とビザ代金を提出する。長期になるエクスペディションの場合、入国後正規のビザを取得する事となるのでとりあえず一番安価な15ドル分の観光ビザを取得するのを薦める。トレッキング・ピークなど30日以内の登山であれば、あらかじめ30日分のビザを取得するのがよいだろう。

尚、ビザ代金は米ドルの現金で支払い、トラベラーズチェックは使えない。

ーネパール観光ビザー

ビザの種類	入国回数	滞在有効期間	ビザ代	日本で取得の場合
シングル	1回	15日	15\$	2500円

	30日	25\$	4000円
ダブル	2回	最初のネパール入国から	40\$ 6000円
マルチプル	無制限	6ヶ月の間にトータル60日	60\$ 10000円

さて入国審査だが、ヴィザを持っている人は“With Visa”、もっていない人は“Without Visa”のカウンターに並ぶ。待っている間、同じフロアーに銀行があるので、多少のルピーを両替しておくといよい。

入国審査を終えたら1階に下り、預けた荷物を受け取る場所(バゲージ・クレーム)にて荷物を受け取る。そのフロアーに入る前、機内に持ち込んだ手荷物のX線によるチェックを受ける。

ターン・テーブルの回りにはポーターが待機しており、税関までの間で、頼みもしないのに荷物を持ったりして、法外なチップを要求してくる事があるため注意が必要。また運んでもらう場合の相場は20~30Rsである。

荷物を受け取ったら、税関(カスタム)にて検査を受ける。

税関申告をする物がない人は「緑」、ある人は「赤」のカウンターに進む。

以前、係員の気分次第的な検査を受け、荷物にチョークでマーキングされるという検査方法だったが、96年よりX線検査を受ける様になった。「緑」のカウンターでは全ての荷物に対してX線検査を受ける。さらに係員に支持された場合は荷物を開けられる。しかし私自身の体験によると、やはり係員の気分次第かX線検査も受けず、通過することとなった。

「赤」のカウンターでは全ての荷物を開き検査を受ける。検査後のX線検査は行われない。

免税で持ち込めるのは以下の通りである。

* 煙草200本(1カートン)、ウイスキー1本(1.15ℓ)又はビール12缶。実際あまりうるさくはチェックされない。

その他、以下のものは自分が使用する場合に限り持ち込みが認められる。

* 双眼鏡1台、ムービーカメラ1台とフィルム12

本、カメラ1台とフィルム15本、レコードプレーヤー1台とレコード10枚、ラジオ1台、カセットデッキ1台とテープ15本、テント1張り、寝袋1個など。

税関にて電気製品など申告するものがある場合は、申請者のパスポートには(Tourist Baggage Re-Export)番号が記される。出国時にこれらの物品、数量が合わないと罰金を課せられたり、出国を一時さし止められたりする。もし、破損、盗難等にあった場合は警察署や連絡官に紛失証明を発行してもらうことが必要である。

カスタムにてチェックを受ける電気製品は、コンピューター、ワープロ、タイプライター、無線機、8mmカメラ、2台以上のビデオカメラ等である。

登山隊にとって問題となる無線機の場合、関係書類を提出し、引き出す事となる。関係書類については無線機の項にて後記する。又、無線機1台につき100\$のデポジットマネーを支払う。デポジットしたお金は帰国時、無線機を持ち帰る事により回収する事が出来る。一般的にはこれら手続きに、時間と手間が掛かるため、申告せずに持ち込み、入国時、無線機の使用許可を取得している。しかしながらX線によるチェックも始まり、ルールも上記した通りなので、トラブル無き様充分に注意されたい。

空港を出ると、ホテルやタクシーの客引き、出迎えの人々が待ち構えている。さて市内への入り方が、エージェントなどの出迎えがあれば別だが、無い場合は、空港出口左手にあるタクシー・チケットを購入しておく、料金交渉などの手間が省け便利である。(空港～市内 200Rs)

カトマンズ市内事情

—カトマンズ宿泊事情—

登山に出発するまで数日滞在することになるがカトマンズでの宿泊事情について触れてみよう。

いわゆるゲストハウスから高級ホテルまで様々な宿泊施設がある。星のないゲストハウスであれば3～10\$程度。個室、シャワー、トイレ、朝食付きの2つ星クラスで30\$～、5つ星の高級ホテルで100\$～、概して高級ホテルは郊外にあり、ゲ

ストハウスはタメルなど市内中心に多くある。又、隊荷の梱包や保管場所の有無なども考慮し選びたい。

—両替—

以前、両替時にもらうバンクレシートの提示などが義務づけられていたが、現在必要はなくなった。しかし、闇両替(ブラック・マーケット)は正規の両替と比べ、現在それほど率も良い訳ではない、又、闇両替は当然ながら違法行為となるのでくれぐれもトラブルに巻き込まれないよう注意が必要。

尚、多額のルピーが残った際の再両替は、バンク・レシートの15%が可能のため、バンク・レシートは捨てずにとっておこう。

さてネパールに持って行く外貨だが、国内線のエア・チケットなどは米ドル建てとなっているが、その他ルピーに両替するのであれば円でも充分なので、円とドルの組み合わせがベターと思われる。

—買い出し—

現在ネパールでは、登山に必要な装備、食糧などほとんど揃える事ができるといってよい。しかし装備などはほとんど中古品で不良品も多く出回っている。又、シーズンによっては希望する品物が揃えられない場合もあるので、その点充分考慮し、重要な物、不確定な物は日本から持ち込む事を薦める。

それでは購入可能な品物について述べてみよう。

—E P Iガス—

登山隊にとって日本からの輸送手段で最も頭を悩ませるのがE P Iガスだが、ネパールではE P Iのボンベが容易に手に入れることが出来る。新品のボンベが出回る事もあるが、概して中古のボンベとなる。現在大きな事故は起きていないものの、それらを購入する際は十分な注意が必要である。出来るなら自分達で充填するなどの配慮も大切だろう。

トレッキングやライト・エクスペディションなどで少量のガス使用であれば、ルクラやナムチェバザールなどでも購入する事もできる。

E P Iガス シングル 7\$～10\$

—L P Gガス—

レギュレータ、コンロの購入が可能で一式 (120 \$)。軽量なアルミボンベのレンタルも行われている。(1シーズン40 \$)

これらの充填はカトマンズ、パラジュ、インダストリーにて行われている。(0.6 \$/kg)

尚、LPGはインドからの輸入となる為、道路事情やストライキ等により品不足となる事も在るため、事前にエージェントなどに手配しておくのが望ましい。

—ケロシン (石油) —

概して登山隊はB.C.及びキャラバンなどの燃料はケロシンが一般的であろう。コンロ、ケロシン共に安価に入手可能だが、コンロは非常に壊れやすいため、スベアのパーツ、工具類もまとめて購入するとよい。又、ケロシンのタンクも非常に弱いので、日本からタンクを用意できればベターである。

ケロシンは、カトマンズ、ポカラなどから離れるに従い割高となる、又、場所によっては購入不可の所もあるので注意が必要。尚、山域によっては、キャラバン中のポーターの支給分も必要。

—登攀具—

これらも登山隊の放出した物がほとんどだが、以下の物が入手できる。カラビナなどあまり安くない物や、時期によっては品不足となるので、早目の手配が必要である。(1Rsは約2円位)

スノーバー L (270Rs) S (250Rs)

アイスハーケン スナグ (500Rs)

” スクリュー (300Rs)

ロックハーケン (100Rs)

PPロープ (25Rs/m)

フレンズ (1500Rs)

カラビナ (350Rs)

メイン・ザイル (100Rs/m)

ワイヤー・ラダー (4000Rs/3m)

—梱包材料—

プラパール、PPバンド、ストッパー、ガムテープ、などは入手不可。通常ドッコ (竹籠) などを利用します。ビニール袋、麻紐、穀物などを入れる袋なども入手可能です。プラスチックの樽 (1500Rs) やナイロン地の大きなバック (500Rs) なども購入可能。

—その他—

テント類はHC用などは日本から用意した方が良いでしょう。ダイニング・テントやトイレ・テントなどはカトマンズにて購入が可能。レンタルもある。

ブルーシートも入手可能であるが、日本の製品と比べ薄手となる。(5m×3m 2000Rs)

銀マットなどは見かけないが、ウレタンの個人用マットなどは入手可能 (500Rs)

その他、シュラフ (3000Rs)、羽毛服 (4000Rs)、など羽毛製品は安価で多く出回っている。

—酸素—

ネパールでは酸素ボンベ、レギュレータ、マスク、などの入手が可能である。主にフランス製AMP、ロシア製チタンボンベ、アメリカ製ラクスファー、などとなるが、但し直輸入された品ではなく、登山隊の放出品なため、充填されている酸素量もまちまちで購入する際は十分なチェックが必要である。酸素もシーズンによっては、希望する品の入手が困難な場合もあるため、エージェントなどを経て早目の手配が必要である。

尚、三叉などの特殊な付属品の購入は難しい。

空ボンベの再充填は、カトマンズのティーチング、ホスピタルでフランス製AMPボンベは可能だが、他の種類は一度インドなどにて再充填する事となる。

—酸素の購入価格—

AMP ボンベ	300 \$	～付属品一式	300 \$
ロシア製	450 \$		300 \$
アメリカ製	450 \$		300 \$

その他、医療用などに使用するのであれば、レンタルも有効。(フランス製AMP一式 300 \$/1シーズン)

—食糧—

高所用の食糧 (アルファ米、ジフィーズ類) など特殊な物を除き、ほとんどの食糧は入手が可能である。

日本食もブルーバードなどで購入できるが、割高となる、又、時期によっては入手出来なかったり、量にも限りがあるので注意が必要。

(文責 野沢井 歩)

■ 寸 感 ■

今夏、パキスタンのバルトロ氷河に日本隊が大挙して入山する。何度か会合を持って諸問題を検討しているが、各隊の知恵で無事を祈りたい。

(山森)

事務局日誌 (3月)

- 3日(月) 入会案内作成
4日(火) クーラ・カンリ隊ビザ申請
8日(土) クーラ・カンリ隊家族会&壮行会
(於、かんぼヘルスプラザ東京)
壮行会60名
9日(日) クーラ・カンリ隊最終協議
10日(月) ヒマラヤ305号発送
11日(火) クーラ・カンリ隊ビザ取得
ニンチン・カンサ隊CMA送金
14日(金) 臨時常務理事会 (山森、八木原、寺沢、中川)
15日(月) ムスターグ・アタ隊協議 (於ルーム辻野、沢田、山森)

- 20日(火) 事故と環境対策研修会資料作成
23日(日) 第4回 高所登山 事故と環境対策研修会(於、豊島区民センター 32名)
24日(日) 第三種監査資料提出
理事会通知
パキスタン建国50周年記念 (於、ニューオータニ 寺沢)
25日(火) クーラ・カンリ隊出発
31日(月) 東京集会 (8名)

ヒマラヤ No.306 (5月号)

平成9年4月10日印刷 9年5月1日発行
発行人 稲田定重
編集人 山森欣一
発行所 日本ヒマラヤ協会
〒170 東京都豊島区東池袋4-2-7
萬栄ビル501号
電話 03-3988-8474
郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

- ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ/総重量6.7kg)
- パルスオキシメーター
(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店 : 日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先 : 株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階
TEL : 03-5245-0511 FAX : 03-5245-0510
(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがご答えします。



マウンテンラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

遥かなる高みへ



個人・グループの手配旅行、航空券の取り扱い専門デスク



キャラバンデスク TEL03-3237-8384

～地球の果てまであなたのキャラバンのお手伝い～

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のバイオニア



株式会社 西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)1391(代表)

キャラバンデスク 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)8384(代表)

大阪営業所 〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F ☎06(367)1391(代表)

カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING(P) Ltd. P.O. BOX3017 KATHMANDU. NEPAL ☎221707

運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店/〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店/〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店/〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館/〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店/〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店/〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- 高崎店/〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店/〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店/〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブラーカ店/〒950 新潟県新潟市天神1-1 ブラーカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店/〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店/〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店/〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店/〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店/〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店/〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店/〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外高部(メールオーダー)/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004